Osaka University Knowledge Archive

Title	近代京都におけるデザイン教育 : 京都高等工芸学校，京都市立美術工芸学校
Author(s)	青木，美保子
Citation	デザイン理論. 2013, 61, p. 156-157
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53443
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

近代京都におけるデザイン教育
── 京都高等工芸学校，京都市立美術工芸学校 ──

青木美保子／京都女子大学

序．近代京都の特異性

近代京都のデザイン教育を考えるとき，産業界でデザインにかかわる人材を育成した教育機関として京都高等工芸学校（現：京都工芸繊維大学）と京都市立美術工芸学校（現：京都市立芸術大学）が挙げられよう。そこでまず近代京都の産業界の状況を確認しておきたい。

明治初期，東遷による産業の低迷を危惧した京都府は，生き残りをかけて産業改革を遂行した。明治２年，府は産業振興の中枢機関として勧業掛，明治４年には勧業場を設立し，積極的な勧業策を推進する。そして改革が進む産業界からさらなる振興のために教育機関を設立してほしいという声があがる。長い間都だった京都の産業は美術工芸が中心であるから，その教育機関に期待された役割は美術工芸界に対する支援と人材の育成であった。

１．京都高等工芸学校の産業界への貢献

1-1．京都高等工芸学校の創立

産業界の要請により京都市の有志が提出した教育機関設立の請願書をうけて，明治32年，貴衆両院が作成した建議案が可決され，明治35年，京都高等工芸学校は設立された。

1-2．学科構成・教授陣と教育研究方針

京都高等工芸学校の本科は，図案科，色染科，機織科で（陶磁器科　昭和４年設置　旧・東京高等工業学校窯業科），初代校長は中澤岩太，創設準備にあたった教官は図案科の武田五一，色染科の鶴巻鶴一，機織科の萩原清彦であった。彼らはヨーロッパに留学し，そこで得た知見を以て教育設備や教程の準備にあたった。加えて，中澤はパリで東京美術学校教授浅井忠に出会い，京都高等工芸学校着任を依頼，浅井は帰国後上洛し，図案科主任教授として活躍する。

設立準備段階で，中澤は仮称「第三高等工業学校」を「京都高等工芸学校」と命名する。ここに「伝統工芸を科学する」という京都高等工芸学校の教育研究方針の方向性を読み取ることができる。

1-3．古法の復活と近代化

京都高等工芸学校の教育研究の事例として，色染科初代主任教授で後に第２代校長を務めた鶴巻の事績に注目したい。

1-3-1．ろうけつ染（蔦纈染）

鶴巻は，古代染色技術で，その後途絶えてしまった「蔦纈」の技術を明治時代末期に復活させ現在の「ろうけつ染」の基礎を築いたことでその名が知られている。明治44年の卒業式で鶴巻は「蔦纈」と名付けた卓被や帯を発表する。昭和２年発行の『近代友禅史』には，「蔦纈」について「鶴巻鶴一が熱心研究して，従来は筒にて模様の蝋線を描きたるを，模様全部を蝋に伏せて線を抜くの新案を出したのは大正元年である」とある。

鶴巻の教え子たちが鶴巻を追悼し思い出を記す京都高等工芸学校同窓会誌『京都高工会会報』（昭和18年２月）の以下のような寄稿文からは，鶴巻の教育や研究に対する姿勢が見えてくる。「何人と雖も製作には他人を煩わさない先生でありました枠張地張の準備，

下絵骨描き，蝋描き下染蝋伏せ，本染，蝋落，最後の着彩及び仕上げに至るまで徹頭徹尾自らの手でなされたものであります」，「先生は古典的染法に興味をもたれそれを科学化し実用化し温故知新先生の考案になれる特許等も数多く，特に藕纈染に新しき手法を案じ独自の境地を開かれ，先生の風格躍如たる幾多の作品を残された，また当時幼稚の域にあつた京都業界の啓発に尽力せられ其余沢を受けて今日盛業を営んで居るものも少なくない」。研究者であり工芸家でもあった鶴巻の姿である。そしてその姿を学生に示すことは，鶴巻の教育者としての姿勢だったのかもしれない。

1-3-2. 波紋染（墨流し）

『近代友禅史』には，藕纈以外の古い染色技法の復活について記した文章もある。そのひとつが「墨流し」である。この復活に取り組んだのも鶴巻であった。鶴巻は大正２年発行の『京都高等工芸学校初十年成績報告附録』に掲載の論文「波紋染」に「京都市ニ於テモ亦八木某此ノ製作ヲナセシト雖数年前其業ヲ廃シ今ハ存セス　墨流シノ製法タルヤ一子相伝ノ法トシテ固ク秘スルヲ以テ其詳細ヲ知ルニ由ナシト雖外門ニ伝ル所ヲ総合シ且ツ著者ノ想定二依ルニ其概要左記ニ外ナラサルカ如シ」。そして欧州の「Marbling」の技法を取り上げ「其法本邦ノ墨流シニ酷似シ而モ墨流シ二比シ使用材料二富ミ（中略）顔料ノ代リニ染料ヲ使用シ布地ニ華紋ヲ染色スルノ法ヲ考案シ波紋染ト名付特許ヲ得タリ」と記す。鶴巻は，「Marbling」と「墨流し」の技法を基に水洗いに耐えるよう改良した「波紋染」を考案したのである。こうして復活した墨流しは，さらに別の学者によって「改良流し染」として研究開発され，大正末には千總が「マドレー染」と称して売り出した。こうして染織業界にも貢献した鶴巻であった。

2．京都市立美術工芸学校の産業界への貢献

2-1. 図案科

明治13年，画の技術を産業に生かすことを目的に創立された京都府画学校は同24年には校名を「京都市美術学校」，同27年には「京都市美術工芸学校」，同34年には「京都市立美術工芸学校」と改称し，学科も明治21年に「応用画学科」を設置，その後何度かの改組や改称を経て同32年に「図案科」となる。

2-2. 図案家の育成

京都市立美術工芸学校の卒業生の就職状況を調べると，明治末期より百貨店に入社しはじめていることがわかる。彼らは大正・昭和初期，和服模様の流行をけん引していた有名呉服店が出自の百貨店で図案家として活躍していたのである。彼らは時代の美意識に即した図案を描く能力を身に付けた図案家であり，「旬の意匠」を表現できる図案家を育成した京都市立美術工芸学校の図案科であった。

跋．京都市立美術工芸学校＋京都高等工芸学校 ── 福永俊吉 ──

大正12年，京都市立美術工芸学校図案科を卒業した福永俊吉は，その後京都高等工芸学校図案科に入学し，昭和２年卒業後，松坂屋図案部に図案家として就職する。昭和８年には京都市染織試験場に就職し助手，商工技手を務め，昭和16年には京都絵画専門学校の教員，昭和24年には京都工芸繊維大学の教員となる。両校と関係の深い福永は，染織工芸品，ポスター，装飾パネル，船舶の室内意匠，劇場の緞帳の図案など，産業デザイナーとして活躍し，多くの作品を残している。福永はそうした産業界での活動の一方で，大学で多くの研究者やデザイナーを育て上げている。この福永の事績は，デザイン教育の一つの在り方を示唆しているのではないだろうか。